

## ミシガン大学研修記(1997-1998)

中里見, 敬  
東北大学文学部 : 助教授

<https://hdl.handle.net/2324/17118>

---

出版情報 : 1998-06. 東北大学文学部中国文学研究室  
バージョン :  
権利関係 :

1998年3月31日

Prof. Feuerwerker から次のような内容の email が来ている。

We are looking forward to your talk tomorrow.  
Prof. Rolston will be introducing you before you speak.  
We are so happy that you are willing to do this.

明日の昼に、学科で研究発表をすることになっており、その打ち合わせのメールだ。"you are willing to do this" では必ずしもないのだが、ほかの人たちの研究発表から様々な啓発を受けてきたのだから、自分もやるしかないのだろうと腹をくくる。実は、外国で、外国語で研究発表をするのが初めてであることに、いまさらながら気づく。

学科の事務室にあるコピー機で、ハンドアウトを作る。事務室の Jennifer がコピー機の使い方を教えてくれる。6ページ分の資料を、両面コピーして、ホッチキスでとめたものが、パサパサと高速で出てくる。日本・中国・朝鮮から東南アジア・インドまで含む大所帯のアジア言語文化学科に、コピー機は1台しかない。そのかわりに、こんな高級機種がはいっているのだ。日本の勤務校では、小さな研究室ごとにコピー機が1台ずつ入っているものの、事務機器としてはあまりに時代遅れの機種に、各研究室の研究費が圧迫されている。アメリカの大学は、経費削減とハイテク化をうまく両立していると痛感する。ただし、僕のような客員の身分では、学科のコピー機はふだんは使わせてもらえない。そこで、重宝するのが街のコピー屋さんだ。セルフ・コピーのほかに、本の丸ごとコピーなども、翌日までにやってくれる。

アメリカでは、講演などで聴衆を笑わせるジョークを言うことが、一種の礼儀作法のようにになっている。堅苦しいことのきらいなこの社会ならではの風習だ。しかし、このことは、よほどの話達者でない限り、あらかじめユーモアを準備しておかねばならないことを意味する。そこで、僕も明日の発表を控えて、笑ってリラックスしてもらえるようなセリフを3つばかり考えて、ハンドアウトの一番上にこっそり書いておく。こうしておけば、あがって言うべきユーモアを忘れるということもないだろう。

1998年4月1日

午前中はなかなか仕事が手に着かないので、コピーすべき文献の整理をする。そして、もう一度、聴衆を笑わせるセリフのシュミレーション。

12時。学科の先生や院生たちが三々五々集まって、持ってきた昼食を食べ始める。これがアメリカの多くの大学で行われる Brown bag meeting の形式だ。研究情報の交換や雑談をしながら、全員が集まるのを待つ。

「先週の学会、Mさんの発表はどうでしたか？」

「いやいや、この卒業生で、理論嫌いのAさんから質問が出たよ。」

「Mさんがフェミニスト批評をやっているのが不愉快なのですかね？」

こんな会話を学科長の Prof. Lin と交わした後、隣に座ったこちらのボス Prof. Rolston と、最近送られてきた研究室発行の雑誌を、ミシガン大学の中国研究に関する雑誌と交換提携することについて、打ち合わせをする。

「図書館に雑誌の交換を担当するセクションがあるはずだから、来週にでも一緒に行こう。Email で連絡するよ。」

15分位過ぎたところで、ボスが僕の紹介をし、僕にバトンが渡される。

まず現在進行中のプロジェクト（研究計画）について簡単に触れる。

「清末から民国にかけての国語運動を、国語の成立というより、むしろ国語の表象の成立という観点で分析したいと思っています。ミシガン大学のアジア図書館には、中国や日本で見ることの困難な書籍や雑誌が豊富に所蔵されていて、私のミシガンでの滞在はとても有意義に思います。」

「それで、ついつい本を読むのより、コピー機の前に立っている時間の方が長くなってしまい、今日このプロジェクトについて話を準備はまだできていません。」（ここで一同の笑い）

一つめのユーモアは成功だ。笑ってもらうには、地の文の口調とはちょっと違う間の取り方があることを、これまでの発表で観察していた。要するに、今からおもしろいことをいいますよ、という合図があり、聴衆もじゃあ笑ってあげましょう、という準備をするようなのだ。なかなか高度な作法である。その通りできたかどうかはわからないが、ともかく笑ってもらえたので安心する。

二つめ、三つめのユーモアも予定通り消化し、いよいよ本題に入ろうとしたところで、院生の Ruth が生後2ヶ月に満たない赤ちゃんを連れて、聴衆の中に混じっているのが目にはいる。そこで、

「今日は欲張って二つのテーマについてお話しますが、Ruthの子供が退屈しないように、手短にしたいと思います。」

と、即興で言ったら、幸いみんな微笑んでくれる。やれやれ、アメリカで話をするのは疲れるものだ。

博士論文の一部を焼き直して、

Rethinking the Baowentang catalogue's 宝文堂書目 reference to huaben 話本

Monologue and Free indirect speech in Luxun's "Shangshi 傷逝"

という二つの話を無事終了する。いよいよ討議の時間だ。

「Narration と histoire とははっきりと区別できるものなんですか？」

「時間詞の区別について、もう少し例を挙げて説明してくれませんか？」

「例文(g)が自由間接話法だとしてわかるのですか？」

「ハンドアウトにある "narration's now" と "narrator's now" とは違いがあるのですか？」

こういった技術的な質問がいくつか続いた後、発表者の主張の立場を問う質問が出される。

「"傷逝"の主人公による言説が、物語内容の部分と物語行為の部分とで分裂しているという主旨でしたが、私にはどちらも女性主人公を死に至らせた真の理由を理解しえない同一の言説であるように思いますが、いかがですか？」

「この語り手は unreliable narrator なのではないでしょうか？ その unreliable narrator の言説をあなたは信頼しすぎていませんか？」

そこで、

「Narrator-I を信頼すべきなのか、character-I を信頼すべきなのか、またそれぞれは信頼できる言説を語っているのか、それらの確定がきわめて困難なのがこのテキストの特徴であり、自由間接話法や独白の多用といった文体的特徴がそのようなテキストの性質を生み出していると考えます。」

と答えて、何とか乗り切る。

現在のこちらの文学研究は、「言語の牢獄」の中にとどまる研究は歓迎されず、研究主体のポリティカルな立場を鮮明にした主張でなければ、聴衆にインパクトを与えられないといってよい。そのあたりのことを意識して、散会後に Prof. Feuerwerker と話をする。

「日本の中国文学研究の一つの特徴は、客観的で実証的な研究だと思います。その意味で、私の発表はもっと主張を発展させる余地があるように思います。」

「そうかもしれませんね。アメリカでは日本と正反対ですよ。自分の理論的立場を強く打ち出すのが当然と見なされます。でも実は、理論の勉強はいい加減で、寄せ集め、聞きかじり、といった風潮もあるのが事実です。あなたの今日の発表は、とても精緻な分析でしたよ。この方面で新しい本が出たので、見せてあげましょう。」

後半の社交辞令を真に受けて喜ぶことにする。

廊下に出たところで Prof. Rolston をつかまえて、前半の話本についての発表の感想を聞く。席上での質問は、後半の"傷逝"に集中して、話本については一つもコメントがなかったのだ。

「宝文堂書目に関する僕の見方と同じような見解を発表しているアメリカの学者はいますか？ Harvard の Prof. Hanan などの本を再読しても、そのような指摘はないように思うのですが。」

「私も関係論文すべてを承知しているわけではないが、君の今日のような話を聞いたのは初めてだよ。少なくとも、ロジックはパーフェクトだったね。」

"関係論文すべてを承知しているわけではないが"と、"少なくとも"という二つの留保を無視し、残りの部分を120パーセント真に受けて、気をよくする。Prof. Rolston は何事にも慎重派なのだ。だから、僕は彼の言うことを全面的に信頼している。

ようやく発表が終わり、肩の荷をおろすことができた。Ann Arbor の長かった冬も終わり、もう夏のような日差しが照りつけている。かつて北京で留学生活を送ったときも柳絮の舞う春が無性にうれしかったが、今日の太陽のまぶしさも最高だ。来週からは夏時間、そして4月末には授業が終わり、夏休みになる。

[\[ミシガン研修記\]](#) へ